



若者へのメッセージ 28

TVキャスター 草野 仁

【第二回】人間は困難な事を可能にする力を持っている

一人の人間とその人の職業の関係は実に面白い。なるべくしてその仕事を生業なりわいにしている人もいる。人間は不思議で深い能力を持っているものだ。

取材記者ではなくアナウンサーで採用

一人の人間とその人の職業との関係には意外に不思議な事が多い。もともとその仕事に就きたいと志を立てその通りになった人も勿論沢山いるのだが、自分では想像もしなかった仕事に就き、それが生業なりわいとなってしまうという人も結構いるに違いない。

実はその後者に私自身が含まれる。

大学を出てNHKの就職試験を受けたのだが、大学でマスコミュニケーションを専攻していた

ので、ジャーナリスティックな仕事をやってみたいという夢を抱いていた。そしてそのためにはまずは取材記者になろうと考えてNHKを受験したのであった。その頃の就職試験のあり様は現在と全く異なり、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌のマスコミ各社が全く同じ日に試験を行うため、重複受験ができず、たった一社の試験しか受けられないのだ。私自身、これからはテレビが発展していく時代だと考えていたので、NHKか民放の雄と言われていたTBSか熟慮した末、より権威がありそうに見えたNHKを受験する事に決めた。



草野 仁 (くさの・ひとし)

昭和19年2月 満州・新京に生まれる
昭和37年3月 長崎県立長崎西高等学校卒業
昭和42年3月 東京大学文学部社会学科卒業
昭和42年4月 NHK入社 鹿児島放送局赴任(その後福岡、大阪局を経る)
昭和52年8月 NHK東京アナウンス室へ主にスポーツ・キャスターとして、モントリオール(昭和51年)及びレークブルラシッド(昭和55年)オリンピックを初め、さまざまなスポーツの実況中継を担当。また、「ニュースセンタ―9時」「ニュースワイド」のキャスターも務めた。
NHK退社 以後、フリーのTVキャスターとして活躍中

試験には手応えを感じていたし、採用通知が届いた時は思いが叶ってよかったと感じた。

ところが封を開け、仰天したのである。そこには私を取材記者としてではなくアナウンサーとして採用するという文面になっていたからだ。

高校まで、長崎で育ち、長崎弁・九州弁の世に身を置いていた私に標準語を駆使するなど出来る筈もなく、また人前で話をする事が好きでもないで、そんな人間にアナウンサーが務まる訳がないと思い、NHKに何かの誤りではないかと問い合せてみた。しかし「いや間違はなく、貴方をアナウンサーとして採用します」との返答である。これを拒めば就職浪人する他はない。私は既に大学受験に一度失敗して親に迷惑をかけていたため、再び浪人するという事も出来ない。その時の親友の一言がこうだ。

「現場に行ってみれば意外に何とかなるものだ」その言葉にも促され、結局そのままNHKに就職する事にしたのだ。

その年にアナウンサーとして採用されたのは16人、アナウンサー希望で採用されたのはたった一人。残りは私同様、取材記者、もしくはディレクター、あるいはカメラマン希望と、不可思議極まりない集団であった。後で知った事だが、NHKも職員の採用に関し試行錯誤を重ねた結果、採用した職員の職務の割り振りは本人の希望は考慮せず、NHKの側で決めてしまう事にしていった時代だったとの事。そして採用した新人達には2カ月半の基礎的な訓練を施したらすぐ、NHKの地方放送局（ローカル局）に赴任させて実戦体験を積みませるといふ荒療治である。

良いアナウンサーにはどうしたらなれるのか。それはまず、最も能動的に仕事出来る分野は何かを探ることだった。十分な観察を行った結果、スポーツアナウンサーの分野ほど、能動的、有機的に仕事出来る分野はないという結論だった。というのもスポーツアナウンサーはラジオ時代から取材者であり、表現者であった。従って、この分野でより評価されるアナウンサーになろうと決意したのである。

そこからスポーツを専門とする歩みが始まった。スポーツ実況をしたいと意思表示すれば「それならまずローカルでやってみろ」ということになり、取り敢えず資格との評価を頂いた。そこからより上位の放送局に異動し、徐々に壁を越えて、入局して10年で東京に還る事が出来た。

アナウンサーの現場で常に思いを巡らしていたことは、「描写はどこまで、精緻に出来るか」「より新しい表現はないのか」「テレビを観ている人々の心を惹き付け、更に熱中させるにはどんな工夫をすれば良いのか」「オリジナリティの在る放送はどのように作っていきけるのか」などということである。当然様々な努力を試みた。当時全国に600人のNHKアナウンサーがいたのだが、時間をかけて全てのアナウンサーの録音を取り一人一人の放送を試聴したのだが、一年

もするうちに、一声聴いただけで「この人は名古屋放送局のAさん」「こちらは鳥取放送局のBさん」と600人全員が声だけで峻別出来るようになったのは、自分でも驚く体験であった。高度に集中すれば人間には不可能と思えることも可能に出来るということなのだろう。そのような思いでアナウンサーの仕事に取り組んでいくと興味深く、そして面白いものだと実感するようになる。

また、若い頃は時として一般的な人気度や認知度の高くない競技種目の実況を命ぜられたが、実際に現場に赴き注意深く状況を観察してみると意外にも面白いポイントが多く見えて来たりする事も興味深い。それゆえに自分は取材対象、実況対象が何であれ、常に最大限の取材を行い、その実況に活かすよう努めた。すると必ずそのことを見ている人が上にいて、さらに大きな舞台での仕事を次々と振ってくれるようになり、充実したアナウンサー生活を送れるようになったのである。

自分では考えてみた事もなかったアナウンサーという仕事を半世紀以上続けて感じることは「人間は自分で想像出来る以上の複合的能力を持っており、困難を可能にする力もっている事だけは間違いない」ということである。